

龍瑛宗『紅塵』の描く歴史としての文学

——半身不随の知識人——

工藤 貴 正

はじめに

『紅塵』は、反国民党・反独裁の民主化運動の流れとその結実としての民主進歩党（民進党）の結成（1986.9）や、その潮流の中で李登輝が本省人として初めて総統に就任（1988.1）するなど、本格的に民主化の推進が容認される黎明期に日本語で書かれた小説であり、言葉を換えて言えば、38年間継続していた戒厳令（1949.5.19-1987.7.14）下でまだ日本語に対する厳しい規制のあった1978年11月に脱稿した小説である。

廖炳惠は陳芳明に対する対話的批評で示した論考¹⁾の中で、「陳芳明は八〇—九〇年代以後、台湾はようやくポストコロニアルの時期に入った」（7頁）、「台湾は最近百年來、日本と国民党による植民地体制下で‘失語症’、‘記憶喪失症’を経験したのであり、いかにして主体性を再構築するかという政治的課題を抱えている」（8頁）と指摘した観点に同意を与えている。

一方、丸川哲史の論考²⁾の中で、「戦後〈光復後〉の台湾の歴史とは、公式的には、日本による植民地統治からの脱植民地化の過程とすることもできようが、二・二八事件や白色テロの被害者にとっては、大陸から撤退してきた中国国民党による台湾の再植民地化の過程でしかあり得なかった。そしてまた、特権層に食い込めなかった大部分の外省人老兵にとっても、戦後〈光復後〉とは、大陸における従軍の功労がもはや色褪せたものとなり、年を経るごとに台湾人に生活権益を侵食されると感じられる、別の意味での再植民地の過程ともなっていた」（149頁）、「二・二八事件とは、ある者にとっては、国民党による再植民地化への抵抗であり、またある者にとっては、旧植民地宗主国の亡霊の復活であったりするような、植民地の〈再帰性〉が意識されるポストコロニアルな結節点となっていることに間違いない」（151頁）とする見解が示される。

二人のこの見解から、筆者は、戦後台湾において龍瑛宗（1911.8.25-

1999.9.26) は「ポストコロニアル」な状況が感知できたのであろうか、もしできたとすれば何時の時期を以て「ポストコロニアル」な状況、つまり「コロニアルの終焉」が到来したと認識したのだろうかとする問題検討の発案を得た。

「ポストコロニアル」(後植民地)理論は、エドワード・サイード(Edward W. Said, 1935-2003)『オリエンタリズム』(1978)の視点から確立された。それは、西洋におけるアジアや中東に対する粉飾されたイメージの伝統が植民地主義や帝国主義の隠れた野望として正当化されたと主張したサイードの理解から始まり、旧植民地と旧宗主国との関係において、旧植民地の人々がいかに抑圧や屈従を受けたかを解明し、西欧中心史観に疑問を投げながらも、欧米の歴史的文脈において文化の再評価・再構築を目指す概念である。旧宗主国との支配関係が終了してもまだ経済的従属関係が固定されたり、また旧体制の残滓として独裁政権が維持されるなどの脱植民地化が進まない状況もこの概念のおよぶ研究領域に属している。

龍瑛宗の日本語作品である『紅塵』(1978)が「日本時代」「光復のころ」「現在(中国時代)」という時期をいつも対比的に描き、その時々々の長短に感慨を籠めて描いている点に着目して、龍瑛宗が「現在」という時期をどのように感じているかを分析する。その分析の手法として、差別化を象徴的に機能させる装置として一等/二等/三等というコード(Code)を使用する。このコードは、身分意識がまだ存在した戦前の日本において、「列車」の一等/二等/三等という空間が差別化を象徴的に保証し明示するコードとして機能していたのと同様に、日本統治期台湾においても、民族、言語、学歴などにより一等/二等/三等という差別化する意識が存在したが、『紅塵』では、この民族、言語、学歴に対してどのような意識の変化が生じたか提示し、そのことにより、龍瑛宗が「現在」という時期を「ポストコロニアル」と感じたか、或いは「再植民地」化と感じたかを示し、この小説がタイトルに示すような単なる「俗世の物語」ではなく、戦後を生き抜いた龍瑛宗の個人の記憶と感慨を日本統治期と同様の手法で綴った「記憶としての文学」(歴史小説)として読めることを示したい。

1 『パパイヤのある街』『邂逅』にみる三重構造のコード

周知の通り、『パパイヤのある街』(『改造』19巻4号、1937.4)は、『改造』の第9回懸賞創作で佳作に入選した作品である。山田敬三(1995)³⁾は、「処

女作『パパイヤのある街』には、その後の創作に現われるすべての原型がすでに、ほとんど出そろっている(357頁)と指摘する一方、「日本語時代の台湾文学は、まったく日本文学と無縁だといえるのであろうか。龍瑛宗の作品は、日本文学との関係を見無視して論じることができるだろうか(347頁)と問題提起をした上で、『邂逅』(『文芸台湾』2巻1期、1941.3)には「ところどころ誤植ではないかと思われるような舌足らずの表現があるのは、後日の作品と比べて不自然ではあるが、その叙述には明らかに、一〇年前、日本の文壇を席卷した新感覚派のそれを意識的に模倣した表現が見られる(358頁)として、横光利一『頭ならびに腹』(『文芸時代』1巻1号)の冒頭部「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で駆けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された」という表現に酷似する表現があることを見出している。

『邂逅』の主人公劉石虎は、龍瑛宗自身を戯画化したような人物で、数年前に某総合雑誌に応募した『パイナップル村』という小説が佳作に推薦され、一躍台湾の文学界に名が知られるようになり、彼と同じ三十五六歳の庄一番の富豪の息子で、内地の大学を出て、信用組合長兼某株式会社の取締役である楊名声にも声を掛けられるようになった、とする設定であり、列車やプラットホームの様子と、三等客室と食堂車が場面の空間設定として選択されている。確かに、作品には「汽車は……煤けた顔つきで踊りこんできた」「美德や謙譲は……ふり落されてしまった」「汽車は……挑みかかるやうに吠えかけ……ひきづりながら、しづかに走りだした」「汽車は板橋を見むきもしないで駆けすぎた。……野に放たれた獣のやうにはしやぎながら、たのしげに走つた」「汽車は『翼ある馬』のやうに飛んだ」「汽車は豊原で脚を止めた」「汽車は台中市に首を突つこみはじめた」「木炭バスはぶるん、ぶるんと仰山な身震ひをしてから、……後足を蹴つて走りだした」などの表現技法が現れる。この表現技法は、上海の新感覚派と称された劉呐鷗(1905.9.22-1940.9.3)が、翻訳集『色情文化』(第一線書店、1928.9)で、片岡鉄平「色情文化」の冒頭を「山動了。原野動了。森林動了。屋子動了。電桿動了。一切的風景動了。……新鐵路施設了之後村裏也築起車站、明空下、青草上、每天火車要走過好幾趟。」(原文：山が動いた。野が動いた。森が動いた。家が動いた。一切の、風景が動いた。……新しい鉄道が敷設されて村にもステーションが建ち、朗かな空の下、青い草の上を、毎日何回か、汽車がとほり出したのだつた。)と訳した表現技法と一致する。無

生物を生物化した表現を何度も繰り返す技法である。確かに、龍瑛宗は日本のモダニズム文学の特徴である「新感覚派」の影響を受けてといえは受けている。ただ、次に示す芥川龍之介『蜜柑』の「列車」の表現手法にも、新感覚派と類似性のあることだけは付言しておく。

次に、『邂逅』には「列車」という装置を使った工夫があることを示す。

主人公劉石虎と名家の御曹司楊名声との邂逅が「三等」客室という空間で行われ、居心地の不快感から「食堂車」へと移動する設定である。この一等／二等／三等の区別或いは差別のある「列車」という装置を用いて、新しい時代の到来を告げた作品に芥川龍之介『蜜柑』（『新潮』1919.5）がある。

『蜜柑』は、「私」以外誰もいない「二等」客車に、顔を赤く火照らし、手に霜焼けのある、垢じみた毛糸の襟巻をつけた、いかにも田舎者らしい十三四歳の少女が「三等」の赤切符を持って乗り込んでくる。「私」はこの下品な顔だちの、不潔な服装の少女に「不快」を感じる。おまけにもうじきトンネルだというのに窓を開けようとしている行為は理解できない。案の定、開いた窓からは真っ黒な煤を溶かした空気が車内へと充満し、「私」は咳きこむことになる。しかし、汽車がみすばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと立てこむ貧しい町はずれの踏切を通った時、「私」は少女の行為の一切を瞬間に理解する。少女はこれから奉公へと赴き、見送りに来た三人の弟たちに蜜柑をばらまいて、彼らの労に報いるために窓を開けたのだということ。この光景を見てからは、「私」には「或得体の知れない朗な心もちが湧き上つて来るのを意識」し、少女が別人のように思えて、「疲労と倦怠」と「不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる」のであった。

藤井貴志 (2010)⁴⁾は、この作品の「列車」という装置の役割を、当時進行しつつあった有島武郎「宣言一つ」（『改造』1922.1）、平林初之輔「第四階級の文学」（『解放』1922.1）、片上伸「階級芸術の問題」（『新潮』1922.2）などに見られる「第四階級」（プロレタリアート、無産階級）問題、「中流下層階級（プチ・ブル）の出自」に生涯苦悩したといわれる芥川自身の立場、さらにフロイトの精神分析学を絡めて、一等車（資産階級・超自我）／二等車（中流下層階級・自我）／三等車（無産階級・無意識）という譬喩的空間と分析する。要するに、一等の空間からは二等の空間は見えず、二等の空間からは三等の空間は見えず、互いに意識或いは認識し合えない存在で

あることを示す。この「／」がお金を払うことによって取り払われ、逃げ込むことを許した空間が「食堂車」である。

さらに、李郁蕙(2000)⁵⁾は、『パパイヤのある街』の隠れた三重構造のコードのあることを指摘して次のように示す。

李氏は、『台湾統治概要』(台湾総督府出版、1945.9)、『日本地理風俗大系』「15巻・台湾」(仲摩照久編、新光社、1931.6)、『大日本地名辞書 続編』(吉田東伍編、富山房、1909.12)などを抛り所に、「旧行政区域たる廳」のあった「当街」とは「南投廳」で、「H街」とは「埔里街」で、「S庄」とは「草屯庄」で、「州所在地」の「T市」とは「台中市」であり、この「街」の近くを「濁水溪」の支流が流れ、その上流にある「開けた番地」「景勝の地」とは「霧社」であることを洗い出し、権力構造としては、暗に日本人(内地人)／漢民族(本島人)／原住民(蕃人・高砂族)という三重構造があることを読み解いている。また、「パパイヤ」という記号の意味は、「内地人住宅」のあたりにしろ、「白い壁の富裕らしい農家」にしる、「矮い倒れかかつてゐる土角造りの貧農の荒屋」にしる、「パパイヤだけが一樣に」無差別に茂り、均質性を表象する。それは、「植民地」台湾に呈する権力関係を暴露しようとすると同時に、唯一その渦中に巻き込まれることのない「パパイヤ」に希望を微かながら託そうとする、切ない思いである、と分析している。

このように、日本統治の台湾においては、単に内地人／本島人という二重構造だけでなく、『パパイヤのある街』や『邂逅』には、「本島人」にも、「内地」の大学卒(楊名声)／中等学校卒(陳有三・廖清炎・洪天送・蘇德芳・劉石虎)／公学校卒という差別意識の三重構造がうまく植民地台湾を支える構図として機能していたことが判る。また、『邂逅』で「一等」については触れられないのは、一等(内地人)／二等(内地帰りの本島人)／三等(本島人)という暗喩がはたらいているからだろう。おそらく植民地台湾では「食堂車」というコードは二等と三等の意識の共有が許される空間であり、そこには、一等は含まれないと想像できる。唯一「パパイヤ」というコードだけが、「／」を取り去った自由な空間のメタファーである。

以上、ここまで日本統治期の台湾すなわち植民地のコードに「一等／二等／三等」という差別の三重構造の図式があることを示してきた。

では、『紅塵』はこのコードの有無或いは変容があるかを中心に分析を加えていく。

2 『紅塵』の構成と登場人物

『紅塵』は、「荔枝の鎮上にて」「牧野と島津」「拍馬屁の男」「奥津城の跡」「老女の唄える」「城内の変貌」「波枕の旅路」「仙人跳まがい」「曇りの企み」「塵埃に塗れて」「媽祖も日本へ」の全十一章で構成される。各章ごとに四人の主人公の内心の意識およびその変化が中心になって物語は進行するが、作品に暗さはなく、おおらかに展開する。そして必ず、「日本時代」と「光復のころ」と「現在（中国時代）」が、日本人と本省人と外省人が対比されながら描写される。まず、四人の主人公の名前（改姓名時）と日本時代の仕事と現在に至るまでの仕事を見ていく。

- a 黄廷輝（吉川輝夫）—ある日本人の会社の日本語通訳—政府が接収したある銀行に勤務
- b 林駿（牧野俊介）—一高・東大を経て台湾総督府の官僚、郡守として地方官—黄廷輝と同じ銀行に専員（本店では部長・次長の下、支店では支店長の下）として入り、その後昇格
- c 王秀山（島津忠光）—街庄役場の助役—黄、林と同じ銀行の同じ職位、その後支店長に昇進
- d 劉三奇—黄廷輝と同じ会社の小使—洋菇缶詰工場勤務、物資の囤積で利潤をあげ、土地を購入、その後プラスチック工場経営者（中小企業の頭家）

この四人の「本島人—本省人」主人公が登場するが、作品は黄廷輝が作者龍瑛宗の分身に近い存在だと推測される視角から描写される。この四人の「日本時代」の地位は、林駿（牧野俊介）・王秀山（島津忠光）／黄廷輝（吉川輝夫）／劉三奇の順で、まさしく日本語の能力と比例する形で位置づけられ、「内地」大学出／中学校出／公学校（国民学校）出の順だと推定でき、彼らは一等／二等／三等として区別されている。ただ、「本島人」でありながら一高・東大を卒業し、官僚・郡守となった林駿は別格的存在である。「現在（中国時代）」は「／」が一つ取れて、王秀山／劉三奇・黄廷輝・林駿の順であるが、一等が見当たらないし、三等もない。すなわち、コードに変化が現れたことを示している。

その「／」で区別する要因は、北京語を如何に早く習得したかに始まり、後は蓄財の多さと世渡りの巧さにあり、人間としての品格や精神的崇高さなどは関係しない。要するに、自分に役立つ人間を如何にうまく取り込む

かだけが示される。

また、構成には小説としてのストーリー性はあまりなく、黄廷輝を中間項としながら、林駿の描写は「日本時代」に如何に尊敬と注目を集めたかが中心に、王秀山と劉三奇の描写は「光復のころ」を契機に如何にのし上がって行ったかが中心に行われる。「現在（中国時代）」は林駿にとっては敗北の記憶であり、その背後にはアメリカがあることが示唆され、王秀山と劉三奇にとっては成功の歴史であり、現実生活が物欲と性欲を如何に満たすものであるかが描かれ、それを感慨を籠めて見つめる黄廷輝がいる。

3 「コロニアル」を支える／崩す精神装置としての 「ごますり」と教養

『パパイヤのある街』では、公学校出の黄助役が上役（内地人）へのオベツカがうまく、中学校出を使って仕事出来る現状に満足している処世術の長けた人物として描かれている。黄助役は、知識の過剰は社会の不幸の原因であり、知識は社会への客観的認識の不足する青少年が社会に反抗し、自暴自棄に陥るもとなるので、知識のある者よりも、職務に傾注し、正確に仕事し、字の綺麗な実用的人物を要求している。このことを知った陳有三は、自分の仕事を失う危機感からも急速に知識欲が低下する。しかし、陳有三の知識欲は、「辯護士試験」「普通文官試験」「中等学校教員検定」という現実的な夢を実現するための実学であり、その現実的な目標が魅力的ではないと知らされたから失速したのである。本来あるべき理想化された教養人として描かれるのが、名前を持たない林杏南の長男であり、彼の思想の根源は、日本では弾圧され、中国では発展しつつあった社会主義思想である。

『紅塵』では、「植民地政府は、台湾人が高い知識をつけることを、決して望んではいなかった。……高い知識をつけると、植民地統治のからくりが見えてくるであろう」と指摘する。ここでいう知識は実学ではない。実学と教養の違いは、林駿の息子の披露宴のシーンで、会話を通して次のように描写される。

「高等学校時代は、われわれも日本人学生の影響をうけて、哲学やら文学やらの本をかじった……理科の学生たちも、それを教養の書として、さかんに読んでいた……哲学や文学の本を読めば、視野が広がるわけで、

将来の世界観にプラスする……われわれ中国人学生もなかなかのガリ勉だけれど、ひろく教養の書を読まないから、どうしても考えが、偏頗になってしまう……われわれの身近には物凄い拝金主義者で凝り固まっている」とする。ただ、東大生は日本の国益を追求する技術にたけただけの優秀な官僚を独占し、日本の右翼と左翼の障地に人材を送り出すという一手包弁だと揶揄することも忘れない。

ここで初めて、龍瑛宗は立身出世の実学とは違う「教養」があって視野と世界観が広がるのだという心情を披歴している。しかし「教養」は、王秀山や劉三奇のような「オベッカ」「おべんちゃら」「ごますり」「拍馬屁」「捧擧丸」を武器に成り上がるものにとっては「腹の足しにはならない」のである。そこで、『紅塵』では次のように表現される。

- ①林駿は高い見識を持っているかもしれないが、もはや日本時代ではないので、うまく調子を合わせることだ。うかつに相手の意見に逆らって自己主張したら、相手の自尊心を傷つけて儼なことはないので、高い地位に這い上がることはできないだろう。
- ②王秀山にとっては、如何にして財富を殖やすか、そして女色を楽しむということは人生の要義だと信じていた。天下国家のことは、青白インテリに任せたらよからう。

また、『紅塵』では何度か「異族」「漢民族」「化外の民」などという言葉で民族性や民族（族群）問題を扱うが、三者はどのように表現されているかを示してみる。

化外の民

- ①黄廷輝には台湾の先住民を、化外の民だと吐いた清朝政府の言葉に、戸惑いと辻褄が合わないように思えてならなかった。
- ②台湾の先住民は化外の民である理論にたいして、林駿は反対意見を述べるだろうが、王秀山だったら要領よく多数意見に附和してうまく言うだろう、と黄廷輝には思われた。その結果、国家にも国民にも災いを来たすことがあろうとも、王秀山の知ったことではないだろう。

漢民族

- ①不条理を耐え忍び雑草のように生きてきた（林駿）
- ②漢民族の物凄い繁殖力（黄廷輝）
- ③強権に馴らされた温和しい民族（劉三奇）

- ④あの誇り高い日本人は、どうして蔑んでいた台湾人たちに、日本人の姓名を分けあたえたのだろう。それは台湾の漢民族という意識を失くし、天皇のために大陸の漢民族を討つためだろう（王秀山）。

異族

- ①れいれいしく島津忠光と改姓名したところで、一等の日本国民になれるわけではない。日本の一等国民は、あくまでも本土の人たちで、二等国民は琉球の人たちであろう。してみれば、三等を辱うするのは、俺たち台湾人や朝鮮半島の人たちであろう（王秀山）。
- ②日本統治の五十年間、この島の人びとは日本人警官に清国奴（チャンコロ）として罵られてそして蹴られて殴られつづけてきた（劉三奇）。

ここで思い出されるのが、魯迅『墳』に所収する「燈下漫筆」（1925.5）に、中国人（漢民族）の奴隷精神を批判しつつもその中で慌てうろたえる民衆には同情を示し、一方、奴隷精神の蔓延る支配者たちが作り上げた中国の歴史を裁断し、その原因に触れた次の文章である。

中国人はこれまで「人」たるの値打ちをかちとったことがない、せいぜいで奴隷であった。現在でもそうだ。ところが、奴隷以下になったことはしばしばあり、珍しくない。中国の民は中立である。戦争の時には、どちら側についているのか自分でさえわからない。なのに、どちら側についていたりするのだ。賊軍がやってくると、官方についているものとみなされ、当然殺されたり略奪されたりする。それでは、官軍が来れば、味方ということになるはずなのだが、やはり殺されたり略奪されたりして、どうも賊軍についているふうなのだ。こういう時には、民は自分たちに決まった主人がいて、その民として扱ってくれればと思う——民とまでは申すまい、自分たちを牛馬として扱ってくれればよい、草は自分でさがして食うから、どちら向きに走ったらよいのかだけ決めてくれればと願う。

（…中略…）

体面を重んずる学者たちが、歴史編纂に当たって「漢族発祥の時代」「漢族発達の時代」「漢族中興の時代」などと結構な項目を如何に麗々しく並べ立てたところで、…（略）…表現があまりにもまわりくどいのだ。もっと、ズバリと明快な言い方がある——

- 一、奴隷になりたくてもなれなかった時代
- 二、しばらく平穩に奴隷でいられた時代

これが交互にあらわれるのが「先儒」のいわれる「一治一乱」である。

(…中略…)

年中戦乱があり、水害早魃が起こるが、抗議の叫びが聞こえて来たことがろうか。打ち合う者は勝手に打ち合い、革命するものは勝手に革命している、それに対して臆せぬ議論を吐く処士があらわれただろうか。国民に横暴を極めた分だけ、外国人にあられもない媚を売る、これが等級差別の遺風でなくして何であろう。(学研版『鲁迅全集』北岡正子訳)

要するに、鲁迅は、王秀山のような、「媚を売り」「うまく調子を合わせ」「相手の意見に逆らわず」「他人事のように知らぬふりをする」人間が、中国の異民族支配を継続させている根源にあることを暴くのである。

ところで、王秀山が「あの誇り高い日本人は、どうして蔑んでいた台湾人たちに、日本人の姓名を分けあたえたのだろうか」と発した疑問に答える興味深い次の論考がある。

呉韋人(2006)⁶⁾は、「戦前日本帝国は、一種の『隣接している領土をもつ帝国』(contiguous empire)で、宗主国と殖民地とのあいだには、地理、文化と人種の面で近縁性があった。この点は、ヨーロッパの海外帝国(overseas empire)と、きわめて異なっている。日本の「公式帝国」、つまり台湾、朝鮮、樺太などの最終的な統治目標は、沖縄や北海道という先例を模倣し、これらの新領土を日本国家の内部に組み入れることにあり、「日本同化主義は特殊な『国民化する殖民主義』(nationalizing colonialism)ともいえよう」(167頁)と指摘し、「政治学者・石田雄が指摘したように、同化植民主義は、明治の公式ナショナリズム(official nationalism)の『日本人を創造する』工程の延長と変形である。この視点からみれば、すくなくとも『公式帝国』の範囲において、戦前日本の帝国形成は、明治の国民国家形成の延長ともいえよう。つまり、日本帝国を拡大中の国民国家とみなすことができるのである。この脈絡から観察すれば、戦前日本内地と台湾との間には同時に『延長』(同一性)と『核心対周縁』(差異)という二重関係が存在していた。台湾が内地の延長でありながら、両者は不平等で従属的な延長関係である。このような延長関係は、政治、経済だけでなく、同じく文化と文学領域にも現われている」(168頁)と指摘する。そして、「われわれが忘れてはならないのは、もし、台湾が日本の周縁であったとすれば、日本もまた西洋の周縁であったことである。このような重層的構造の

底部にある台湾の境地を、私は『二重の周縁性』(double marginality)と呼ぶ。二重の周縁性という境遇のもとに、台湾は日本内地より、さらなる徹底的な敗北、そしてさらなる紆余屈折の近代的主体性の形成の道を経験しなければならなかった」(170頁)と述べ、さらに、「差別的統治は、第一次世界大戦以後、台湾最初の近代的ナショナリズム運動を引き起こした。一九二〇年代において、台湾ナショナリズム運動の主な目標は、政治的民族自決を追い求めていたことにある。しかし、同化主義に抵抗するため、運動家たちは、文化的主体性の概念を構築しようと試みた。とはいえ、彼らは、根本的な困難に直面していた。『台湾的』主体性を表現しうる言語とは何か、という問題である」(170頁)と指摘している。

福沢諭吉が『文明論之概略』(1875)で示した文明(civilized)／半開(half-civilized)／野蛮(barbarian)と三分したが、文明とは中心であり、中心とはあくまでも西洋(ヨーロッパ)であり、半開や野蛮は西洋の周縁を意味し、日本も台湾も中国も西洋から見れば周縁である。

ここまで示した内容から、『紅塵』では民族性における「／」はすべて過去のものが語られ、「異族」(日本人)はいないが、現在「漢民族」と「化外の民」(原住民)の間に「／」が入るかは語られていない。

最後に、北京語(漢語)と台湾語(閩南語)と日本語という言語に関わるコードから差別や区別の変化があるかを見ていく。

4 差別装置としての日本語—英語／北京語(漢語)・台湾語(閩南語)／日本語

言語は思考方式を決定する。黙想する時使用するのは母語である。

龍瑛宗は『歌』(『台湾文芸』2巻1期、1945.1)の中で、どれだけ熱心に日本語を学んだかを描いている。

いまでこそ国語普及運動が、全島いたるところさかんであるが李東明の少年時代は、国語を勉強するにも、なにしろ片田舎のこととて、書物が容易に手に入らず、内地人と話をする機会とて極めて稀であつた。そんなわけで、国語熱に燃えてゐる少年時代の李東明は、道ばたに捨てられた活字のある紙ぎれを拾ひあげては、それを飢ゑたもののやうに読んだこともあつた。

「辞の林」の奥に踏み込もうとしたのは、二つの大きな動機があつた。一つは、国語の「辞の林」を隈なく遍歴することによつて、わが国の姿を知らうとした。

もう一つは、国語によつて本島人の感情、生活を表現しやうと思つた。

『紅塵』に描かれる「現在(中国時代)」の中では、北京語(漢語)と台湾語(閩南語)および日本語はどのように扱われているかを抜き出してみる。

北京語(漢語)

- ①北京語は北京地方に住む人びとを除いては、それぞれに山東訛り、福建訛り、浙江訛りというふうに、独特な訛りがあって、なが年きき慣れた者には(ははあ、四川だな)、とすぐに聴き分けられた。
- ②大陸からきた年配の人たちの北京語の訛りもひどいものだった。
- ③俺の北京語は、大陸から来た人に誉められるし、それに中国文だって、俺の方が、よっぽど流利だ、と王秀山は自信にみちていた。

台湾語(閩南語)

- ①台湾人の若い世代は、もう日本語を知らなかった。大陸から流れてきた人たちは、日本語はもちろん台湾語すら解らなかった。
- ②台湾人は主に福建省の南部地方から来ているので、いわゆる閩南語を話しているのだが、同郷の人もやって来て、同じ閩南語を話すが、二百年の時間の距たりで、もう訛りの違いができていた。探勝客の言葉で、はじめて本省と外省の見分けがつけられた。

日本語

- ①日本時代、あんなに輝いていた言葉(「わたしの郡守さん」という言葉)は、異なる時代の湿気にあてられて、もうほろほろに赤錆びてしまった。
- ②大陸から流れてきた人びとの中には、過去に日本軍の残虐を受けてきたためであろう、むしろ日本を恨んでいた。テレビ(テレビ)で英語を聴かれぬ日はないことがあっても、日本語を聴くことは滅多になかった。それは、この土地の人たちは、日本語を聴くと懐旧の情をくすぐるし、大陸の人たちには古い傷を触れさせたくない配慮があったのかも知れない。
- ③林駿は、よく覚えているが終戦の翌年には、早くも日本文図書雑誌取締規則が公布された。それで日本文への籀がひきしめられた。そのために今にいたるも、日本文の図書や雑誌は自由自在に読めないのだった。

ここに示した台湾における使用言語の説明からは、本省人は北京語／閩南語／日本語を使用する順に差別があり、外省人は北京語・訛りのある北

京語・閩南語を使用しても同等で言語差別がなく、本省人には言語において差別があることを示している。

最下位におかれた日本語についてすこし詳しく見ていく。

『紅塵』では、日本語に絡めて、皮肉をこめて王秀山と林駿のそれぞれの息子の披露宴が対比的に描写されている。まず、林駿の披露宴の和やかなシーンから触れておく。

林駿家は相変わらず日本屋敷に住み、彼の息子の披露宴に親しい友人だけが呼ばれるシーンである。彼らは殆どが日本語教育を受けた年配者ばかりで、話す言葉は日本語が多く、宴席で食べている料理は中華料理である。

- ①壁の本棚を見ると、殆んど日本文の書籍ばかりであった。……今の時代には役に立ちそうにもない本ではないか、と黄廷輝は思ったりした。
- ②台湾大学のC教授は林駿と同じく東大の出身だが、「学生たちの話によると、C教授は、なかなかの勉強家であり、学識も深いけれども、彼の生硬な中国語は学生たちは聴いて解らなかつた。……宝の持ちぐされとは、このことを言うのであろうか。

一方、王秀山の息子の披露宴は、金稼ぎ目的であり、大勢に税金通知書だと冗談をいわれる「紅帖」が送られてきた。その受付でのシーンである。背広姿の男と招待係の間で押し問答が続いている。林駿と劉三奇の会話である。

「なんだろう……あれは薩摩の守ですよ……薩摩の守とは……日本の薩摩の守はただ乗りでしょう。台湾の薩摩の守はただ食いですよ。新しい職業の一種です。但し背広一着という資本が要りますがね……王秀山君も嘗ては島津忠光だったから、あの男も薩摩の国から来たと言えばよかったのに」林駿も思わず辛辣な皮肉を言ったので、一座はどっと笑った。

二つのシーンともに龍瑛宗の日本語への愛着が籠っている。二つ目のシーンは中国語に翻訳してもなんの面白みもない。日本語の薩摩守島津「ただのり」（忠則・忠典・忠紀などの漢字があてられるが、現実には存在しない人物である）と「タダ乗り」および「タダ食い」を掛けた音遊びである。

ところが、林駿は娘のアメリカ留学がきっかけで妻といさかいが起こる。彼は日本留学を勧めるが、妻に「あんたは、時代に取り残された人よ」と言われ、あまりにも興奮しすぎて、その後、脳卒中で倒れ、半身不随になっ

てしまう。『紅塵』では、日本統治期の優秀な知識人が戦後台湾で冷遇された現実を、典型的な代表人物である林駿に投影させて描いている。その不遇な林駿が追い打ちをかけられるように半身不随となってしまったとするストーリーに、龍瑛宗は1947年の「二・二八事件」以来の本省人知識人の悲劇を仮託したかのようである。

以下に示すのは、倒れるまでの林駿の思いである。

- ①若い人たちのにとってアメリカ留学は熱門なのに、日本留学は冷門だった。洋碩士(修士)、洋博士、それは何といふ^{ママかぐわ}香しい名称であろう。
- ②猫も杓子もアメリカ行き。(2回)
- ③ほんとうに猫も杓子も、アメリカ留学熱をたぎらせていた。
- ④アメリカ帰りは、出世が早い。
- ⑤ふしぎなのはアメリカ留学生は、新大陸に行ったら殆ど帰ってこなかった。
- ⑥アメリカの国籍をとることが、留学生たちの憧れの的だった。
- ⑦昔は牛番だった農家の子弟が、奨学金をもらって、猫も杓子もアメリカへアメリカへ、草木もなびいた。
- ⑧娘子軍たちは新大陸であわよくば如意郎君を見つけだすことであった。
- ⑨こちらの若い男たちは、みなアメリカに散らばってしまった。
- ⑩妻は、林駿の意見に抗い、この地の優秀な人材は、みんなアメリカに行っているし、娘の大事な白馬王子は、アメリカにかぎる。……アメリカにのめりこむ気性の激しさにおどろいた。
- ⑪時流にとり残された林駿を見て、せめて娘だけは、時流から外れないように、アメリカに留学させて、あわよくば前途のあるすばらしい如意郎君を掴もう、という魂胆だった。往日のかがやきの夢よ、もう一度、というところだった。

『紅塵』の中で、これだけ系統的な批判と思いが描かれるところはほかにない。龍瑛宗は現在のアメリカ熱をかなり意識的に批判している。そして、ここまで読み解いてくると、国民党統治下の台湾における言語政策と一般民衆の意識が、一等／二等／三等の関係において、本省人にとっても北京語／台湾語／日本語の関係にはなく、英語／北京語／台湾語／日本語の関係にあり、背景にはアメリカの存在があることを鮮烈に印象づけるのである。おそらく言語差別のない外省人も英語／北京語／台湾語となるだろうことが予想される。

そこで、王秀山と黄廷輝の対照的な価値観の相違を示して小説は締めくくられる。

- ①駿兄、君は日本人の考えに禍されて、せっかくの「昇官発財」の機会を、みすみす喪くしてしまったな。可惜呀可惜！
- ②いずれにしても林駿は、ふたたび職場に戻ることはあり得ないであろう、……あの仏手柑のような手では、筆も握ることもできないからだ。それを思うと、黄廷輝は一抹の寂しさを覚えた。……彼は、みっちり和本を読んだ甲斐があって、話の折り折りに、やはり、何か教えられるところがある。彼は清廉だった。こんな社会では稀少価値だ。……どうして社会は、彼のような男を起用しようとししないのだろうか。

5 同時代の時代性を捨象し歴史背景に重点を置く表現手法

『紅塵』は台湾社会の大きな変革の中で出現した小説であるにもかかわらず、小説の中には変革に託した希望や国民党一党独裁がもたらした政治・政策への不満も語られることなく、「俗世の出来事」が「日本時代」「光復のころ」「現在（中国時代）」という時期の対比を通して、その時々々の憶いに感慨を籠めながらも淡々と描いている。そこで、『紅塵』が執筆されていた同時代的な背景とは次のようなものであったことを確認しておく必要がある。

台湾は1970年代初頭米中接近（1972.2「上海コミュニケ」）により、国連の追放・脱退という国際的地位の急落に見舞われる。若林正丈によれば、台湾の「中華民国」という「正統中国国家」の姿勢を堅持する遷占者国家（settler state）の外部環境は、アメリカの世界戦略の変更を機に音を立てて逆境に転じ、台湾はその帝国システムの周縁にあいまいなアイデンティティのままに位置づけられることになった。「七二体制」の形成である⁷⁾、と述べる。

また若林は、台湾の対外的アイデンティティの危機が始まったことによって起こった体制内部の変化にも触れて、蒋介石（1887.10.31-1975.4.5）が1969年に交通事故に遭って以降急速に衰弱すると、その長男蔣経国（1910.4.27-1988.1.13）は同じ年、行政院副院長（副首相）にまで上り詰め、72年6月行政院院長に就任すると、12月「中央民意代表增加定員選挙」を実施し、また、71年12月党中央常任委員会が決定した「人材獲得拡大

方案」の実施を腹心の李煥（1917.9.24-）に当らせ、党と政府の中央レベルでの本省人エリートを登用し、72年の蔣経国内閣（1972.6-1978.6）時期から、本省人閣僚の数（8名）が倍増するという「現地化（本土化）」「台湾化（Taiwanization）」に進む体制改革が促進された⁸⁾、と指摘する。

さらに、「増加定員選挙」と党・政府への本省人登用の拡大は、「党外」勢力の誕生と成長を増長させ、1969年台北市の「欠員補充選挙」では「草の根党外」の流れをひく黄信介が立法委員に当選、72年の「増加定員選挙」では、黄信介の支援を受けた市議会議員康寧祥（1938年生まれ）が立法委員に当選するなど、以後、77年地方選挙、78年「増加定員選挙」と「党外」の挑戦とそれが促す選挙の「熱度」は高まるばかりであった。そして、国民党に挑戦するオポジションとして「台湾党外人士助選団」を組織し、憲法遵守の徹底、戒厳令解除、拷問、不法逮捕・監禁の禁止などを謳った「十二大政治建設」を「党外共同政見」として提案してキャンペーンを展開し、1979年12月にはその後の議会制民主主義や「中華民国台湾化」の礎となる「美麗島事件」が発生している⁹⁾。

このように激烈に変化する台湾情勢に身を置いていたとは思われないほどの淡々とした表現手法で『紅塵』は「俗世の出来事」を通して「日本時代」「光復のころ」「現在（中国時代）」を対比した台湾の歴史背景を叙述するのである。

ところで、王惠珍（2003）¹⁰⁾は、1937年4月『改造』に掲載された「パイヤのある街」に与えた同時代の日本文壇の批評者たちが、「殖民地における内地人と本島人の差別問題に触れるのを避け」た背景には、同時代日本における言論統制や言論弾圧の厳しい状況があり、それは被支配者としての環境におかれた龍瑛宗が小説を執筆した状況に呼応することを見出している。そしてまた、尾崎秀樹（1971）の「『新聞配達夫』『牛車』『パイヤのある街』ともに日本文で書かれた小説」を「年代順に通読してみると抵抗から諦めへ、さらには屈従へと傾斜する台湾人作家の意識がある程度たどれるように思われる」という評価基準は、「前後、龍瑛宗は、台湾人作家として抗日精神が不足しており、『屈従へと傾倒した』という罪名をおわされる」という評価基準と呼応していることも見出している。

尾崎秀樹が評論家として1920年代に起こった台湾ナショナリズム運動を敷衍させながら抵抗・抗日精神を殖民地の現場で生きる人々にお仕着せした理論の枠組みは、本島人（漢民族）ならどのような状況にあっても「抗

日精神」があつて当然だとするものにほかならず、その時代の大きな渦に飲まれ、抗うにも抗いきれないという時代潮流の凄まじさやそこにある政治力学を無視したバーチャルなものであり、戦後、国共内戦に敗れて渡台した国民党の文化政策としての日本化＝奴隸化論を正当化し、差別化する理論構造にもつながり、日本の「同化」から国民党の「国民」(中国)化へと政策が移つても、王氏の指摘するように周縁に生きる人々にとっては「差別が温存される仕組みはなくなるならない」のである。その意味で、尾崎秀樹が示した「屈従へと傾倒した」という言葉は理論の足場を誰の視点に置くかでかなり違った解釈になると考えられる。

若林正丈によると、公定中国ナショナリズムの台湾歴史解釈モデルにおいては、日本植民地統治期の歴史は、康寧祥の立法院質問の歴史議論の前置き分の如く日本支配当初の武装抵抗が取り上げられ、それに続いては抗日戦争期の「皇民化」運動が取り上げられ日本支配の負の遺産が強調される(そしてそれによって上からの「中国化」政策が正当化される)のが常であった。これに対して「党外」の台湾抗日再評価は、公定の解釈モデルでは無視・軽視されてきた20年代抗日運動の意義を強調する形で異議を申し立てを行っているのである。…(略)…彼らが強調した20年代抗日運動こそ、そこで形成された抗日台湾ナショナリズムの言説により、「内地人」に対すところの「本島人」のエスニシティを政治化し、「台湾人」という「族群想像」を生み出した運動である。…(略)…1970年代に台湾1920年代抗日の「中国性」を宣揚することは、このような来歴をもつ「台湾人」という族群想像を、中華民族の内部における族群想像として正当化し、かつそれへの「承認と尊重」を求める、「台湾人」族群想像の再・再創造に他ならなかった。ただ、それはまだ中華民族内部の存在として位置づけられており、中華民族と対置される別のネーションとして想像されたのではなかった¹¹⁾、として、1970年代「党外」運動の意義と限界を指摘している。

おわりに

若林によると、台湾は、歴史上三つの異なった性格の帝国の周縁に位置づけられてきた。まず、古典的な世界帝国としての清帝国、近代植民地帝国としての日本、そして戦後のアメリカの「インフォーマルな帝国」であ

る¹²⁾、とする。

『紅塵』のコード分析でも背後にアメリカの存在があることを暗示していた。では、戦後台湾における本省人にとっての台湾とは如何なるものだったのであろうか。

本省人である龍瑛宗の目から見て、戦後台湾における植民地化の象徴的装置を示すコード「一等／二等／三等」に変化があるかどうかである。これは、同じ本省人同士の間関係には明らかにコードの変化が生じている。民族(族群)間の問題については、明らかなコードが示されていなかった。言語を通して本省人と外省人の関係を較べると、外省人には差別関係がないのに、本省人には差別関係が存在し、北京語／台湾語／日本語という抑圧を受けていることが判明した。ただ、本省人と外省人に共通して、一等言語として英語の存在があり、アメリカの影響力は言語関係を通じてその大きさが痛感させられる。

そこで、次のように纏められよう。

- ①本省人同士の間関係は日本からの支配をのがれて「ポストコロニアル」な状況にあると判断できる。
- ②本省人と外省人の間には、言語を通じた分析からは、明らかに本省人に不利な差別関係があり、特に同化政策のもと日本語を自由に操る本省人にとっては日本語は最下位の「三等」の位置に置かれており、明らかに「再植民地」化と判断されても言い訳しようのない状況を作り出していた。

すると、『紅塵』は次のような作品として読めるだろう。

『紅塵』は、日本統治期を体験した四人の主人公の意識の様態と変化を通して、それぞれ四人にとって光復／終戦／敗戦とは何を意味したのかを彼らのその後置かれた現実生活から綴り、特に国語として日本語を習得した本島人インテリの置かれた差別的な環境と不自由な精神状態からは、戦後に新しい植民地が再生したのではないかと懷疑する思いを、記憶／記録する文学(歴史)として構造化／小説化した作品として読み取れることである。

注

- 1) 廖炳惠「台湾：ポストモダンか？ ポストコロニアルか？」『越境するテ

- クスト：東アジア文化・文学の新しい試み』研文出版、2008.8
- 2) 丸川哲史『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社、2000.6
 - 3) 山田敬三「哀しき浪漫主義者：日本統治時代の龍瑛宗」『よみがえる台湾文学』東方書店、1995.10
 - 4) 藤井貴志「芥川龍之介と社会主義」『芥川龍之介——〈不安〉の諸相と美学イデオロギー』笠間書院、2010.2
 - 5) 李郁蕙「植民地の政治力学と〈場〉の表象：龍瑛宗「パパイヤのある街」」『比較文学』42、2000.3
 - 6) 吳叡人「もう一つの「閉塞時代」の精神史：龍瑛宗・台湾戦前小説にみられるコロニアルな主体の形成」『日本近代文学』75、2006.11
 - 7) 若林正丈『台湾の政治：中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008.6、109頁
 - 8) 注7)に同じ、128-134頁
 - 9) 注7)に同じ、139-148頁
 - 10) 王惠珍「「パパイヤのある街」に与えられた日本文壇の批評」『野草』71、2003.2
 - 11) 注7)に同じ、152頁
 - 12) 注7)に同じ、27頁

参考資料

- 1 塚本照和「「台湾文学」に関するノート（一）：龍瑛宗の『パパイヤのある街』」『天理大学学報』119、1979.3
- 2 尾崎秀樹「台湾についての覚え書——台湾人作家の三つの作品」『日本文学』1961.10（所収『近代文学の傷痕：旧植民地論』岩波書店、同時代ライブラリー71、1991.6）
- 3 下村作次郎・中島利郎・藤井省三・黄英哲編『よみがえる台湾文学』東方書店、1995.10
- 4 石田雄『記憶と忘却の政治学——同化政策、戦争責任、集合的記憶』明石書店、明石ライブラリー23、2000.6
- 5 王惠珍「龍瑛宗の「原住民族発見」——花蓮体験がもたらした意味」『野草』74、2004.8
- 6 戴国輝『台湾一人間・歴史・心性』岩波書店、岩波新書41、1988.10
伊藤潔『台湾—四百年の歴史と展望』中央公論社、中公新書1144、1993.8
若林正丈『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房、ちくま新書318、2001.11
新城俊昭『高等学校 琉球・沖縄史』沖縄県歴史教育研究会、1994.3

赤嶺守『琉球王国—東アジアのコーナーストーン』講談社、講談社選書メ
チエ297、2004.4

- 7 本論との関わりから、上記(6)の文献を利用し、『紅塵』の中で、「沖繩」
が二等、「台湾」が三等と記される歴史背景を整理すると以下の通りである。

1661年鄭成功はオランダ軍を駆逐し、「反清復明」を掲げ、鄭一族は3代
22年に亘って台湾を支配した。1684(康熙)年の清朝の版図に入って以降、
原住民は服従・教化の度合いにより熟蕃(同化)／生蕃(野蛮)として区分
した。1895年の下関条約以降は、台湾は日本(内地人)／漢民族(本島人)
／原住民(蕃人、平埔族・高砂族)となり、日本臣民は本土人／琉球人／台
湾・朝鮮人という三区分の意識によって差別された。

琉球国(1429-1879)は、第一尚氏の尚徳(1461-1469)が、1406年に中
山で覇権を掌握し、1416年に北山の山北王統(攀安知)を、1429年南山の
山南王統(他魯每)をあいっいで滅ぼして樹立した統一王朝であり、琉球本
島を中心に、周囲小さな離島の集合で、総人口17万に満たない小さな王国
であった。第二尚氏の尚円(1470-1476)の代から尚泰(1848-1879)の間、
那覇港を国際貿易港として、隣接した大国であった明(入貢171回)・清の
海禁政策や日本の鎖国政策下における競合相手の不在により、東シナ海の地
の利を生かした国際的な中継貿易で栄えた。1609年に島津氏は樺山久高を
総大将に、約3000の兵と100隻余の軍船を琉球に侵攻させ、北部の今帰城、
王都の首里城と陥落させている。首里城が開城してからは、薩摩藩による実
質的な支配下に入り、1868年の明治維新以降、71年に明治政府は廃藩置県
によって琉球国の領土を鹿児島県の管轄としたが、72年には琉球藩を設置
し、琉球王尚泰を琉球藩王に封じた。79年の琉球処分により沖繩県が設置
され、沖繩県令として鍋島直彬が赴任するに至り、王統の支配は終焉する。
ところで、29代当主は島津忠義(ただよし)だが、薩摩守には「ただのり」
という当主はいない。